



外国语言学与
应用语言学博士文库

現代日本語
の否定表現
に関する研究

王华伟 著

现代日语
否定表达
研究



中国海洋大学出版社

外国语言学与应用语言学博士文库

现代日语否定表达研究

王华伟 著

中国海洋大学出版社
China Ocean University Press
青岛·Qingdao

图书在版编目(CIP)数据

现代日语否定表达研究/王华伟著. —青岛:中国海洋大学出版社,2007.7

ISBN 978-7-81067-997-8

I. 现… II. 王… III. 日语—否定(语法)—研究
IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 064048 号

出版发行 中国海洋大学出版社

社 址 青岛市香港东路 23 号

邮政编码 266071

网 址 <http://www2.ouc.edu.cn/cbs>

电子信箱 qdfgm@yahoo.com.cn

订购电话 0532—82032573(传真)

责任编辑 冯广明

电 话 0532—85902469

印 制 日照报业印刷有限公司

版 次 2007 年 7 月第 1 版

印 次 2007 年 7 月第 1 次印刷

成品尺寸 158 mm×234 mm

印 张 20

字 数 360 千字

定 价 35.00 元

总 序

语言学博士在 20 世纪 80 年代还是凤毛麟角,但随着国家的不断发展和富强、高等教育的飞速发展、学科建设的不断提升,外国语言文学和语言学及应用语言学的博士点在全国不断涌现,培养的语言学博士越来越多。中国海洋大学出版社看到这个契机,决定向这些毕业的博士征稿,推出语言学博士文库出版计划,陆续出版学术水平高、写作质量好的博士论文。我认为这是一个极其明智之举,将会对语言学基础理论和应用语言学理论的研究起到很大的推动作用。

博士论文出版后通常按专著对待,作为专著的一种,也无可厚非。但博士论文与一般专著相比有它自己的特点。它更强调学术性,重点放在理论的创新上,以解决理论问题为主,而专著虽然必须是学术性很强的,但它还要考虑应用性,例如,要考虑适合一定的读者群,致力于解决当前社会上亟须解决的问题,或者在某个领域普及相关的理论知识等。

从学术的角度讲,博士论文与其他著作相比有它的优势。首先,它的选题经过严密的论证和讨论,又有导师的指导,是学术界所关心的研究题目。第二,它研究的重点更加集中,要解决的理论问题更加明确,通常整个研究只围绕一个论题展开。第三,它研究的方法更加明确和恰当,而且研究方法通常得到突出,从而使研究结果更具说服力和实证性。第四,也是最重要的一点,作者通常要倾三年之力,专心研究这个题目,这样,他对相关的前沿理论和所使用的方法都会十分熟悉;同时他还要考虑专家提出的问题,对每个理论点进行反复研究、琢磨和探讨,填补所有的漏洞,使论文从理论体系和体例上更加完善。另外,他要特别突出他的创新点,得出更有价值的结论等。

本《文库》的推出不仅可以吸收优秀的博士论文成果,同时对作者本人的发展和提高也起着极其重要的作用。作者要使自己的博士论文达到出版的要求,不仅要作文字和格式上的修改,还要在理论的建构和论述上完善自己的论文,这对作者既是一个挑战,也是一个提高的过程。

本《文库》的读者应该大部分是从事语言学理论和应用研究的工作者,包括专业研究人员、大学教师等,但更大而且更加迫切的读者群应该是全国的从事语言学和应用语言学学习和研究的硕士生和博士生。他们不仅可以通过阅读《文库》的论文接触到前沿的语言学理论和应用语言学理论,还能学到博士论文写作的思路、方法和程序,应该说受益更大。

我们希望《文库》有越来越大的读者群,同时我们也希望更多的博士学位获得者加入我们《文库》作者的行列,为提高我国语言学和应用语言研究的水平贡献自己的力量,但同时也应该知道,本《文库》是精选的博士论文,所以必须把自己的论文精心修改,达到可以出版的水平再拿出来出版。

感谢中国海洋大学出版社以其对学术事业的追求和热爱,以敏锐的洞察力和与时俱进的思路策划和设计了这个文库。感谢出版社在语言学和应用语言学的教学与研究中所做出的突出贡献。我也希望我们的广大作者也和出版社的领导和编辑们一起为推动我国语言学研究、语言教学和语言学习理论的进一步发展而继续努力。

张德禄

教授、博士生导师

中国海洋大学外国语学院

2007年6月7日

序

关于日语否定表达方式的研究,早在华伟来上外攻读博士学位之前就已经积累了较为可观的研究成果。

华伟在与我商量博士论文研究课题的时候,提出希望继续进行日语否定表达方式的研究。我们一起讨论了该课题的研究价值,在仔细检阅了当时日本国内外有关的先行研究成果之后,觉得这一课题值得继续研究。

记得当时我对华伟说:“我们所有的研究都必须是对国内日语教学和研究有帮助、有价值的。”也就是说,我们的研究必须与日语教学实践相结合,必须对有关方面的研究有所开拓,有所助益。我之所以强调这样一个想法,是因为我知道华伟有很扎实、很全面的语言学和日本语学方面的基础理论知识,而且勤于思考,善于探索,我有些担心他过于追求理论上的完善和深入,而忘记了我们作为一个语言教育工作者在教学和科研上所应承担的义务。

华伟表示赞同我的看法。正是基于这样一个想法,华伟的这篇博士论文,从目前的结构来看,几乎涵盖了迄今为止日本国内外有关日语否定表达方式研究中所涉及的几个最重要的课题,也可以说是迄今为止有关这方面最为全面、最为深入的一次研究。

华伟的切入点是对肯定表达与否定表达的“对称性”和“非对称性”的探讨,这是从理论角度考察了日语肯定表达与否定表达在语义和语用方面的特征;在此基础上论文主要从语法角度全面考察了否定表达方式的各种“共起要素”,包括疑问词、副词、数词、助词等;继而论文进一步考察了否定表达方式的“否定范围”和“否定焦点”,这一部分基本上还是从语法和语用的角度考察否定表达方式的结构和语用特征。

整篇论文层次清晰,结构严谨。曾经有一位参加答辩的教授表示过这样一个意思:大约我们所能联想到的问题,都能在相应的地方找

到有关的讨论。我想这应该是华伟的性格所致。每一句话、每一段文字、每一个问题的提出和讨论,华伟都唯恐表达不周到,讨论不全面,论证不充分。

正因为如此,华伟的文章读起来可能会觉得有些晦涩。但是,当我在读他的文章的时候,读着读着,发觉每一句话都是那么谨慎,那么字斟句酌,感觉到一种呕心沥血的氛围。

华伟是一个非常执著的人。在我身边的三年之中,我看到他总是表现出一种思索中的痛苦,很少看到他释然开怀的表情。我真希望他以后做学问不要这么痛苦。但其实我也知道,真正要做好学问,只能是一件痛苦的事情。

我虽然是华伟的导师,其实我很少对他的论文提出具体意见,我甚至常常感到要想追上他的思路,真是一件很辛苦的事情,换句话说,整个的过程,也是我的一个学习过程。

现在华伟的论文要出版了,我为此由衷地感到高兴。我觉得这样才能真正实现我们预期的目标:为教学和科研作出贡献。

皮细庚

2007年1月28日

前 言

本书是在笔者提交上海外国语大学博士学位论文的基础上修改而成的。

本研究主要是对现代日语肯定与否定表达的对称性和非对称性、否定表达的共起要素以及否定的范围和焦点等问题所进行的实证考察研究。

全书共分六章。本论部分为第一章至第四章。第一章是关于否定的基本问题的探讨。阐述本研究使用“否定表达”这一用语的缘由；提出否定辞的功能为“对现实的再认识”。第二章是对肯定与否定表达中的对称性和非对称性的特征问题所进行的探讨，指出当句子处于非对称时的制约要素。第三章考察第二章所指出的制约要素，也就是与否定表达的共起要素——疑问词、否定惯用词组、否定副词、数量词以及提示助词“は”、“も”等，通过具体分析得出，各共起要素可以与肯定否定表达共起的用法特点和只能与肯定或者否定表达共起的制约条件。运用认知语言学的“典型理论”等相关理论以及语料库对否定的共起要素进行考察分析。第四章考察了否定的范围和焦点问题。以谓语否定和命题否定为基本前提对否定的范围和焦点，特别是对比焦点进行了考察分析。

笔者早在进入博士研究生课程之前就已经对否定的相关问题开始有所涉及，但都是一些零碎的不成系统的研究。进入上海外国语大学之后，在导师皮细庚教授的指导下对否定问题有了明确的研究方向。通过皮细庚教授的悉心指导，使笔者不仅对否定问题有了更深刻的认识，还在语言研究的把握上有了更高层次的提升。非常感谢皮细庚教授，没有他高瞻远瞩的指导我是无法顺利完成博士学位论文撰写的。

还要感谢学位论文答辩委员会的吴大纲教授(上海外国语大学)、许慈惠教授(上海外国语大学)、沈宇澄教授(上海外国语大

学)、吴侃教授(同济大学)、陆留弟教授(华东师范大学),各位评委在论文答辩过程中提出了很多有益的卓见,有些笔者已反映在论文之中,有些被笔者定为了自己今后的课题。在此,对各位评委的辛勤工作再次表示诚挚的谢意!

在论文撰写过程中,上海外国语大学的张建华副教授、博士研究生毛文伟讲师、硕士研究生陈文栋;中国海洋大学外国语学院副院长李庆祥教授;北京日本学研究中心的硕士研究生毕晓燕等为笔者提供了大量的研究资料。还有原中国海洋大学日本外教平川美穗先生以及日本札幌国际大学的肖勇副教授的几位日本学生,她们对论文中例句的正误给予了确认。在此对这些朋友、同事一并表示衷心的感谢!在笔者读博士研究生期间,妻子无怨无悔地承担了所有家务,使笔者能够安心地在他乡顺利完成学业,在此,对她的无私奉献表示由衷的感谢!

本书的出版得到中国海洋大学外国语学院博士点专著基金的资助。

王华伟

于青岛中国海洋大学

2007年1月30日

目 次

序 章	(1)
1 本研究の目的、意義、方法	(1)
2 先行研究	(4)
2.1 否定辞「ない」に関する研究	(4)
2.2 肯否表現の対称性と非対称性に関する研究	(7)
2.3 否定のスコープとフォーカスに関する研究	(9)
2.4 否定表現における取り立て助詞「は」に関する研究	(14)
3 問題提起	(16)
4 本研究の構成	(16)
第一章 否定に関する基礎問題	(18)
1 「否定表現」と「否定文」など	(18)
1.1 「否定表現」について	(18)
1.2 「否定文」について	(19)
2 否定表現の認定	(21)
3 「ない」の機能	(22)
3.1 非存在への再認識	(22)
3.2 命題内容に対する訂正への再認識	(24)
第二章 肯否表現における対称性と非対称性	(28)
1 対称性と非対称性	(28)
1.1 一般的に言われる対称性と非対称性	(28)
1.2 言語に表される対称性と非対称性	(29)
1.3 肯否表現における対称性と非対称性の定義	(30)
2 意味論・構文論の立場における肯否表現の対称性と 非対称性	(33)
2.1 肯否表現における対称性	(33)
2.2 肯否表現における非対称性	(36)

3	語用論の立場における肯否表現の対称性と非対称性	(43)
3.1	語用論の立場から捉える否定表現の範囲	(43)
3.2	語用論の立場から捉える否定表現の下位分類	(43)
第三章	否定表現の関与要素	(68)
1	疑問語表現	(70)
1.1	疑問語の種類及び否定表現との関わり	(71)
1.2	肯否両用表現としての疑問語	(72)
1.3	いわゆる否定極性表現——「誰も」	(88)
1.4	寺村秀夫(1991)説に対する訂正	(99)
2	否定慣用表現	(99)
2.1	単語的否定慣用表現	(101)
2.2	連語的否定慣用表現	(120)
3	否定副詞	(128)
3.1	否定副詞の共起要素	(129)
3.2	否定副詞の下位分類	(132)
4	数量表現	(149)
4.1	数量表現 X	(150)
4.2	数量表現 Y	(160)
4.3	数量表現 Z	(168)
4.4	まとめ	(176)
5	取立て助詞「は」「も」	(177)
5.1	取立て助詞「は」と否定表現	(177)
5.2	取立て助詞「も」と否定表現	(195)
第四章	否定表現におけるスコープとフォーカス	(204)
1	否定のスコープとフォーカスに対する認識	(204)
2	述語否定のスコープと命題否定のスコープ	(206)
2.1	述語否定のスコープと命題否定のスコープの可能性	(206)
2.2	述語否定のスコープと命題否定のスコープにおけるフォーカスのあり方	(207)
3	否定のフォーカスになり得る要素及び取り立て助詞との関係	(211)
3.1	否定のフォーカスになり得る要素の全体像	(211)

3.2 対比フォーカスと取り立て助詞	(259)
4 語用論の立場から見る否定のスコープとフォーカス	(264)
4.1 反事実の否定表現のスコープとフォーカス	(264)
4.2 同語反復の否定表現のスコープとフォーカス	(266)
4.3 「のではない」否定表現のスコープとフォーカス	(268)
4.4 まとめ	(280)
 第五章 結論と今後の課題	 (281)
1 否定辞の機能	(281)
2 肯否表現における対称性と非対称性	(282)
3 否定表現の関与要素	(283)
4 否定のスコープとフォーカスに対する認識	(284)
5 述語否定と命題否定	(284)
6 フォーカスになりうる要素	(285)
7 語用論の立場から見る否定のスコープとフォーカス	(286)
8 取り立て助詞と対比フォーカス	(286)
9 否定表現に対する再整理と今後の課題	(287)
 用例の出典	 (288)
主要参考文献	(299)

序 章

1 本研究の目的、意義、方法

本研究は現代日本語の否定表現に関する問題を中心に考察するものである。

言語学上、特に文法上の否定表現には「問題が多い」(三上章 1963)。問題が多いということは否定の機能が明らかになっていないし、関わる方面が多いこと等によって生じたかと思う。問題の多い領域は更なる研究の必要があり、それなりの価値もあるが、否定表現の問題ならすべて研究の範囲にするのは欲張りであり、能力的にも時間的にも不可能である。従って、本研究は肯定表現における対称性と非対称性、否定表現の関与要素及び否定のスコープとフォーカスを中心に考察するものである。

無論、どんな研究でも解決すべき問題を完全に究明し、少しでも後学の研究に資することが、最高の目的に違いないのであるが、筆者自身の能力などにより、目標に辿り着かない可能性も十分に考えられるので、この複雑で問題の多い否定表現の研究に分け入るために、これまでより少しばかり明るい光をつけることができたと思う。

否定表現は常に肯定表現を元に作られている。これは既に従来の定説になっている。それでは、否定表現として成立しているものは必ずその肯定表現も成立し、逆に肯定表現として成立するものは否定表現も必ず成立するということになるのであろうか。少なくとも100%正解とは言えない。確かに一つの文として肯定表現もその対応する否定表現も成立する場合があるし、否定表現として成立するものはその肯定表現も成立する場合がある。しかし、どちらか一方しか成立しない場合も実際に存在する。例えば、次の例の(1)(2)は肯定表現しか成立しない例であり、(3)(4)は否定表現しか成立しない例である。

(1) * とても優秀ではない。①

(2) * まるで雪のようにではない。

(工藤真由美(2000)より)

(3) * その絵はちっともおかしい。

(4) * 船便の小包は来月まで着く。

(本田晶治(1982)より)

また肯定表現は、各要素が肯定されており、肯定のスコープ内である。これに対して、否定表現の場合はそうはいかず、否定のスコープがどこまで伸びるか、またどんな要素が否定のスコープに入りやすいか、どんな要素が入りにくいか、これまでの研究でかなり議論されてきたが、依然として曖昧な点が残っているように思われる。例えば加藤泰彦(1985)は次の例を挙げて否定のスコープを説明している。

(5) 彼は船で南極へ行った。

(6) 彼は船で南極へ行かなかった。

例(6)は(5)に対応する否定表現であるが、通常次の(7)～(9)のような意味に解され得る。

(7) 彼は南極へ行ったが、それは船ではない。

(8) 彼は船でどこかへ行ったが、それは南極ではない。

(9) 彼は船で南極へ行ったのではなく、帰ってきたのだ。

どうして一つの表現に対していくつもの意味に解釈し得るのか。実例においてもそういう現象が生じるのであろうか。

とにかく、こういった否定の問題はよく議論されている。よく議論されるということはそれなりに研究する価値があるということであろう。本研究は、否定表現の対応する肯定表現が必ずしも成立しないことをはじめ、否定表現から対応する肯定表現に置き換える際、疑問語表現、否定副詞、否定慣用表現等の関与要素が存在していること、厳密に意味を表すために否定のスコープとフォーカスを明確にする必要があること等を究明、指摘したことにより、日本語教育に役立てると共に、今後の更なる否定表現の研究にもささやかな示唆を与えることを期待している。

これまでの研究は意味論、構文論の立場から行われることが多いようである。勿論語用論の立場からの研究も一部にある。本研究は意味論、構文論という伝統的な立場を取る一方、語用論の「協調の原則」「スケール」、認知言語学の「プロトタイプ理論」等の相関理論をも導入して考察を行なう。またコーパスに基づいて否定表現の関与要素の共起状況に対す

① 「*」印は不適格な表現を表す。

る調査も実施する。

言葉は社会の変化と共に変化するものであるので、絶対普遍的な原則はない。それを考慮に入れると、言葉の現象は多くの場合連続体をもって存在するものと思われる。従って、認知言語学のカテゴリー論の根幹を成すプロトタイプ理論を導入する。

プロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体をいう。プロトタイプはカテゴリーを考える場合にまず念頭に置かれる、いわばそのカテゴリーの代表的な成員であり、そのカテゴリーを踏まえての思考では、特に修正を必要とするような状況が出てこない限り、プロトタイプの成員のことを想定して進められるのが普通である。

そして私たちが物事をカテゴリー化する場合、そのプロトタイプを核とし、その周りにさまざまな成員を位置付けることで、全体を構造化していると思なす。この考えに基づけば、カテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺的なものがあったり、成員間で段階性がみられることになる。

(河上誓作 1996:p. 32)

これから本論を進める際、随所プロトタイプのと周辺的という概念を利用することを断っておく。

本研究に使われる用例について少し説明するが、先行研究からの引用以外に、いずれも実例である。その主な出典はCDROM 版の新潮文庫の100冊・新潮文庫明治の文豪・新潮文庫大正の文豪、青空文庫の文学作品、朝日新聞のコラム、中日新聞の社説、東奥新聞の社説、北海道新聞の社説①、小松左京コーパス②である。どうしても該当の用例が手に入らない

① CDROMの他にいずれもインターネットからダウンロードしたもので、いずれも2005年06月05日までのものである。それぞれのサイトは次の通りである。

青空文庫:<http://www.aozora.gr.jp/#main>

朝日新聞:<http://www.asahi.com/>

中日新聞:<http://www.chunichi.co.jp/>

東奥新聞:<http://www.toonippo.co.jp/>

北海道新聞:<http://www.hokkaido-np.co.jp/>

② 小松左京コーパス(<http://aci.soken.ac.jp/>)は会員制のもので、使われる実例は2003年までにダウンロードした作品から検索したものであるが、それ以降サイトがどういうわけか開けられなくなった。

場合、直接にYahoo! JAPAN(<http://www.yahoo.co.jp/>)を利用して検索した用例もある。以上選んだコーパスは特に特別な理由がなく、唯手に入れやすいからである。できる限り多くのジャンルのデータをカバーしたいと思いながら、やはり文学作品の方に傾いてしまう結果になった。

否定表現は肯定表現を元にして作られ、否定表現の使用が制限されているので、コンテキストが必要であることは多くの先行研究が指摘したところである。本研究は基本的にその原則に沿って行なっていくが、肯否表現における対称性と非対称性について検討する場合、当該の否定表現の文という最小限のコンテキストの下に検討を進めたい。否定表現と肯定表現とは二値理論学によると「命題は二値、すなわち真あるいは偽である」(H. ライヘンバッハ著 石本新 1982)ということで、同時には成立し得ないわけである。それにもかかわらず、否定表現のその対応する肯定表現が成立する可能性を考察するので、それ以上のコンテキストを抜きにするのである。というのはコンテキストが多ければ多いほど成立する可能性が低くなる傾向があるからである。従って、実例の否定表現は基本的に原文のまま使用するが、対称性と非対称性に用いられる場合、対応する肯定表現に書き換えられることがあることを断っておく。

日本語の文はその意味によって平叙文、疑問文、命令文、感動文の四種に分類されるのが普通である(日本語教育学会編 1982)。本研究では、その平叙文を中心に、否定辞が文末に付く場合と文中に含まれる場合を研究の対象とすることにする。従って一々「平叙文」を呼ぶ必要はなく、肯定の場合は肯定表現、否定の場合は否定表現というように呼び分ける。

2 先行研究

日本語の否定表現に関する研究は多方面に亘っているが、本研究に直接に関わるものと言えば、否定辞「ない」、肯否の対称性と非対称性、否定のスコープとフォーカス、否定表現における取り立て助詞「は」などが挙げられる。それぞれの領域に関する先行研究を簡単に振り返って見よう。

2.1 否定辞「ない」に関する研究

否定辞「ない」については、助動詞、補助形容詞、本形容詞の三つに分けられる研究がある(高崎みどり 1984、吉田優子 1984)。これは、動詞に下接したものを助動詞、形容詞・形容動詞に下接したものを補助形容詞、単

独で用いられるものを本形容詞という使い方によって分けられたのである。従来動詞に下接した「ない」は助動詞、それ以外の「ない」は形容詞として二分されてきた(山田孝雄 1936、橋本進吉 1969、三尾砂 1958、時枝誠記 1941 等)。これは主に「ない」とその直前の要素との間に助詞「は、も、さえ、など」が入るかどうかにによって、入るのは形容詞で、入らないのは助動詞であるとされている。

また助動詞と補助形容詞を区別する学説(橋本進吉 1935、佐伯梅友 1953、湯沢幸吉郎 1977、三尾砂 1958)と区別しない学説(吉田金彦 1971、大久保忠利 1970、西尾寅弥 1972)もある。

それ以外に、品詞として認めないが、異なるものとして命名された考えもある。鈴木重幸(1972)は動詞に下接した「ない」を「接尾辞」、形容詞に下接した「ない」を「むすび」、渡辺実(1971)は動詞に「ない」を下接した全体を「否定用言」、形容詞に下接した「ない」を「形式用言」とそれぞれ呼び分けている。

形態としては一つの「ない」であるが、学者によって下位分類をしたり、それぞれ違った名前を付けたりするのは決して無駄な作業ではない。とにかく何らかの目的があつての研究だから、いずれも価値があると思う。しかし、本研究の目的からすれば、いずれも否定を表すという働きを重要視する立場なので、区別しない立場を取る。

続いて否定の機能に関する研究を検討してみる。否定すること、或は否定されることはどういうことであろうか。鈴木一彦(1962)は否定表現によって残されているものが存在すると指摘している。つまり否定は「零」を意味しないことになるのである。湊吉正(1971)、杉浦実(1971)も鈴木一彦の考えと軌を一にする。湊吉正は「中領域範囲暗示説」を出して「肯定的限定が大領域の中に一定の小領域を画定するような限定であるとみられるのに対し、否定的限定はその大領域の中で画定された一定の小領域を除く残余の中領域の範囲を暗示するような限定であるとみられるのである」。杉浦実では全体的に見れば、肯定文が限定的な働きを成すのに対して、否定文は非限定を表すとされている。鈴木一彦(1962)の例をもって説明してみよう。

(10) 彼は歩いていない。

(11) 雪は降っていない。

例(10)の否定表現からは「立ち止まっている」という意味と、「走っている」という意味の二つが考えられるし、(11)の方からは「止んでいる」「雨が降っている」などの事実が予想し得る。否定表現の「歩いていない」と